

三條中納言水飯の事……………三〇

長谷寺参籠の男利生にあづかる事……………三〇

獵師仏を射る事……………三二

恒正が郎等仏供養の事……………三二

博打駕入の事……………三二

伴大納言応天門を焼く事……………三二

吾妻人生費をとどむる事……………三六

藏人得業猿沢の池の龍の事……………三六

空入水したる僧の事……………三六

出家功德の事……………三六

穀断の聖露頭の事……………三六

宗行の郎等虎を射る事……………三六

陽成院ばけ物の事……………三六

夢買ふ人の事……………三六

清滝川聖の事……………三六

寛朝僧正勇力の事……………三六

後の千金の事……………三六

宇治拾遺物語 序

- 一 十一世紀後半に成立したと推定される説話集。作者は源隆国。現在は散佚したらしく原形は不明。
- 二 太政官の次官。大政に参与し、奏上、伝宣の役を務めた。右大臣の次に位する。
- 三 醍醐源氏。権大納言源俊賢の次男。
- 四 源高明。醍醐天皇の皇子。西宮左大臣と号す。安和の変により太宰権帥に左遷。帰京後、天元三年（九八〇）没。六十九歳。
- 五 源高明の三男。
- 六 京都府宇治市にある天台、浄土兩宗に属する寺院。阿弥陀堂（鳳凰堂）で名高い。藤原頼通の造宮。
- 七 一切経（大藏經・仏教聖典の総称）を収蔵する蔵。
- 八 平等院内の僧房。
- 九 以下の「」内は底本および諸本に欠脱し、万治本により補ったもので、「」を気にかげずに読んでほしい。

世に宇治大納言物語といふ物あり。この大納言は隆国といふ人なり。西宮殿の孫、俊賢大納言の第二の男なり。年たかうなりては、暑さをわびて、暇を申して、五月より八月までは、平等院一切経蔵の南の山ぎはに、南泉房といふ所に籠り居られけり。さて宇治大納言とは聞えけり。

髻を結びわけて、「をかしげなる姿にて」、菴を板に敷きて「すずみ居侍りて」、大なる打輪を「もてあふがせなどして、往來の者」上下をいはず「呼び集め」、昔物語をせさせて、我は内にそひ臥して、語るにしたがひて大なる双紙に書かれけり。

天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり。それがうちに貴き事もあり、「をかしき事もあり、恐ろしき事もあり」、哀なる事もあり、きたなき事もあり、少々は空物語もあり、利口なる事もあり、様々やうやうなり。

利仁芋粥の事(巻一)

- 一 平安初期の武人。藤原時長の子。延喜十五年(九一五)鎮守府將軍となる。
- 二 摂政・関白の異称。
- 三 大臣大饗のこと。
- 四 大饗の時の料理の残りもので、庭に投げて下衆などに拾い取らせられたもの。取り食み、鳥食。鳥などに与えるもの意か。またそれを拾って食う者。
- 五 五位の通称。

六 「曹司」すなわち「部屋」にさがって休息してゐること。
 七 「いびきをさせ給へ」の略。「いびき」は人を誘う時の声。「させ」は尊敬の助動詞。「いびきをさせ給へ」は「いびきを誘はせ給へ」の意。

- 八 濃い紺色の指貫袴。指貫袴は直衣、狩衣などの時つける袴で、裾の回りに緒をさし通して、はいてから緒をくくりつける。
- 九 もとは公家が狩りの時に用いた衣服。のち常服となる。まるえりで袖にくくりがあり、脇を縫い合わせず、指貫の袴を用い、裾を袴の外に出し、烏帽子を用いる。
- 一〇 調度持。「調度」は武家で弓・矢の特称。
- 一一 牛車の牛飼または乗馬の口取り。
- 一二 ここでは下男の意。雑役夫。
- 一三 現在の京都市東山区粟田口町。大津市に出る口。

- 一四 逢坂山。京都府と滋賀県の境にあり、関所があったのでいう。
- 一五 園城寺。滋賀県大津市にある天台宗寺門派の総本山。

- 一六 福井県の南部、敦賀湾に面する北陸第一の都市。

一七 矢を盛って背に負う具。

利仁芋粥の事

今は昔、利仁の將軍の若かりける時、その時の一人の人の御許に恪勤して候ひけるに、正月に大饗せられけるに、そのかみは大饗果てて、とりばみといふ者を払ひて入れずして、大饗のおろし米とて、給仕したる恪勤の者どもの食ひけるなり。その所に、年比になりて給仕したる者の中には、所得たる五位ありけり。そのおろし米の座にて、芋粥すすりて、舌打をして、「あはれ、いかで芋粥に飽かん」といひければ、利仁これを聞きて、「大夫殿、いまだ芋粥に飽かせ給はずや」と問ふ。五位、「いまだ飽き侍らず」といへば、「飽かせ奉りてんかし」といへば、「かしこく侍らん」とてやみぬ。さて四五日ばかりありて、曹司住みにてありける所へ、利仁来ていふやう、「いびきをさせ給へ。湯浴みに。大夫殿」といへば、「いとかしこき事かな。今宵身の痒く侍りつるに。乗物こそは侍らね」といへば、「ここにあやしの馬具して侍り」といへば、「あな嬉し、嬉し」といひて、薄綿の衣二つばか

りに、青鈍の指貫の裾破れたるに、同じ色の狩衣の肩少し落ちたるに、したの袴も着ず。鼻高なるものの、先は赤みて、穴のあたり濡ればみたるは、涙をのぐはぬなめりと見ゆ。狩衣の後は、帯に引きゆがめられたるままに、ひきも繕はねば、いみじう見苦し。をかしけれども、先に立てて、我も人も馬に乗りて、川原さまにうち出でぬ。五位の供には、あやしの童だになし。利仁が供には、調度懸、舎人、雑色二人ぞありける。川原うち過ぎて、粟田口にかかるに、「いづくへぞ」と問へば、ただ、「ここぞ、ここぞ」とて、山科も過ぎぬ。「こはいかに。ここぞ、ここぞとて、山科も過ぎつるは」といへば、「あして、あしこ」とて、関山も過ぎぬ。「ここぞ、ここぞ」とて、三井寺に知りたる僧のもとに行きたれば、ここに湯沸すかと思ふだにも、物狂ほしう遠かりけりと思ふに、ここにも湯ありげもなし。「いづら、湯は」といへば、「まことは敦賀へ率て奉るなり」といへば、「物狂ほしうおはしける。京にて、さとのたまはましかは、下人なども具すべかりけるを」といへば、利仁あざ笑ひて、「利仁一人侍らば、千人と思せ」といふ。かくて、物など食ひて急ぎ出でぬ。そこにて利仁胡篋取りて負ひけ